

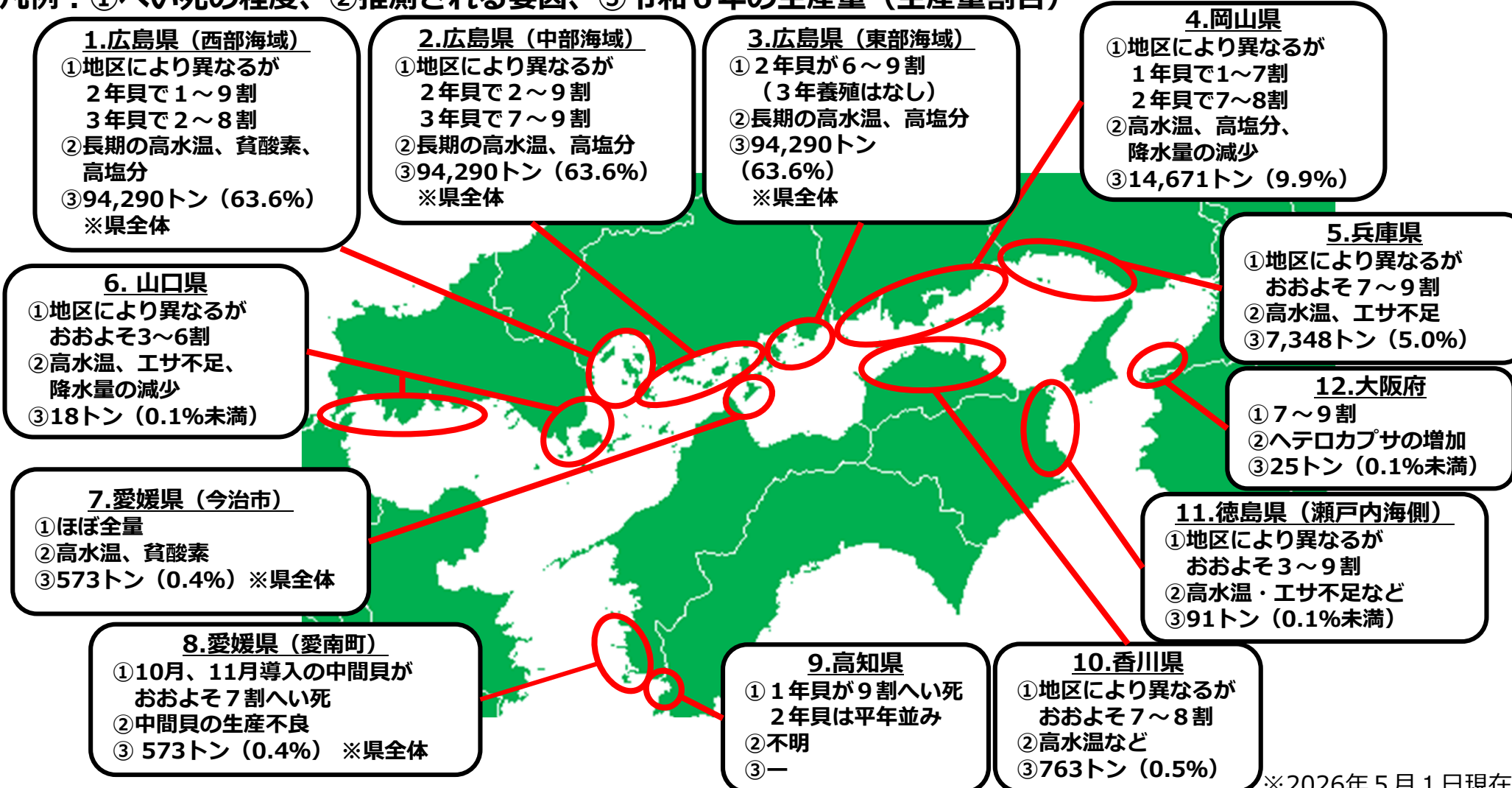
# 養殖カキのへい死の状況（1）（各県からの聞き取り）

○カキ養殖を行っている各県に状況を確認。瀬戸内海の各県において、多いところで7～9割のへい死が発生している。

○推測される要因は、高水温は共通しているほか、高塩分、エサ不足、貧酸素等が挙げられている。

※平時のへい死割合は一般に3～5割

凡例：①へい死の程度、②推測される要因、③令和6年の生産量（生産量割合）



※2026年5月1日現在

# 養殖カキのへい死の状況（2）（各県からの聞き取り）

○瀬戸内海以外の地区について、宮城県の一部の地区でも例年以上のへい死発生が見られた。

※平時のへい死割合は一般に3～5割

凡例：①へい死の程度、②推測される要因、③令和6年の生産量（生産量割合）

## 13.福岡県

- ①例年並み
- ②—
- ③1,464トン(1.0%)

## 14.三重県

- ①例年並みか少ない
- ②—
- ③1,716トン(1.2%)

## 15.岩手県

- ①概ね例年並みだが、一部地域で2,3年貝がへい死
- ②高水温など
- ③5,058トン(3.4%)

## 16.宮城県（北部）

- ①地区により差があるがおおよそ2～9割
  - ②高水温など
  - ③15,190トン(10.3%)
- ※県全体

## 17.宮城県（中～南部）

- ①地区により差があるがおおよそ2～8割
  - ②高水温など
  - ③15,190トン(10.3%)
- ※県全体

※2026年5月1日現在

# 各県からの聞取り情報まとめ（1）

※2026年5月1日現在

No.	地区	へい死の程度	身入り	海洋状況	推測される要因
1	広島県 (西部海域)	地区により異なるが 2年貝で1～9割 3年貝で2～8割	例年より悪いが、1月後半から徐々に身入りの向上が見られる	高水温、貧酸素、高塩分	長期の高水温、貧酸素、高塩分による生理障害
2	広島県 (中部海域)	地区により異なるが 2年貝で2～9割 3年貝で7～9割	例年より悪いが、1月後半から徐々に身入りの向上が見られる	高水温、高塩分	長期の高水温、高塩分による生理障害
3	広島県 (東部海域)	2年貝が6～9割 (3年養殖はなし)	例年より悪いが、1月後半から徐々に身入りの向上が見られる	高水温、高塩分	長期の高水温、高塩分による生理障害
4	岡山県	地区により異なる。 1年貝で1～7割 2年貝で7～8割	ほとんどの地域で例年より小さいが、年明け以降、身入りの向上が見られる	6月下旬から9月中旬まで、水温が前年より2℃高く推移。9月中旬以降は昨年並み。	高水温、高塩分、降水量の減少
5	兵庫県	地区により異なるが、 おおよそ7～9割	例年よりかなり小さい。 2月末時点で少しずつ身入りの向上が見られる	夏季の高水温期間が長かった。 夏季のクロロフィル量が少なかった。	高水温、工サ不足
6	山口県	地区により異なるが おおよそ3～6割	例年並みか、小さい	夏場の高水温の継続	高水温、工サ不足、降水量の減少
7	愛媛県（今治市）	ほぼ全量	例年よりかなり小さい	高水温、貧酸素	高水温、貧酸素
8	愛媛県（愛南町）	10月、11月導入の中間貝が、 おおよそ7割へい死	生残した貝の身入りは概ね良い	水温が例年よりやや高かった。	中間貝の品質
9	高知県	1年貝が9割へい死 2年貝は平年並み	2年貝は例年並み	水温、塩分、酸素濃度はR6年と大きな変化なし。	不明
10	香川県 (漁業者等からの聞取り)	地区により異なるが おおよそ7～8割	例年より小さい	高水温、工サ不足	高水温、工サ不足、貧酸素
11	徳島県（瀬戸内海側）	地区により異なるが 3～9割程度	例年より小さい	鳴門市では8月下旬から9月中旬まで平均より水温が高く、 底層の酸素濃度も低かった。	高水温、貧酸素、工サ不足
12	大阪府	7～9割	例年並みか、小さい	高水温、 ヘテロカプサの増加	高水温、 ヘテロカプサの増加

# 各県からの聞取り情報まとめ（2）

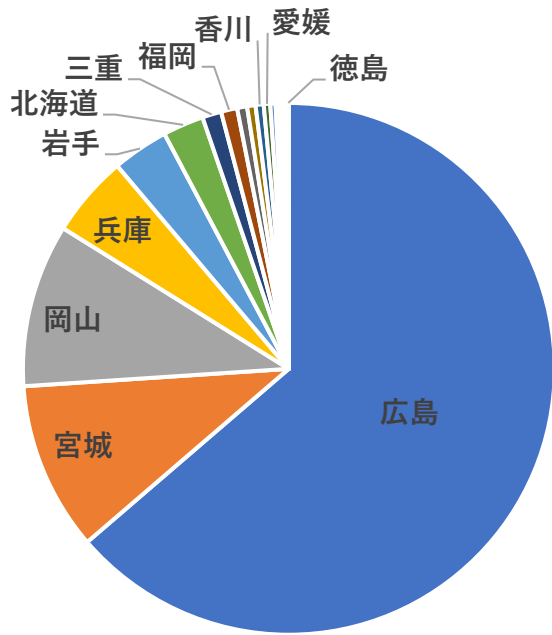
※2026年5月1日現在

No.	地区	へい死の程度	身入り	海洋状況	推測される要因
13	福岡県	例年並み (例年3～5割)	例年並みか、やや小さい	夏季の水温が例年よりも高く推移。	—
14	三重県	例年並みか、少ない	例年並み	8月中旬以降、水温が前年より2～3℃低く推移。	—
15	岩手県	概ね例年並みだが、一部地域で2,3年貝がへい死	例年並みか、やや小さい	夏季の水温が例年よりも高く推移した。	高水温
16	宮城県 (北部)	地区により差があるが、おおよそ2～9割	例年より悪い地域が多いが12月以降身入りが向上	夏季の水温が例年よりも高く推移した。	高水温等
17	宮城県 (中部、南部)	地区により差があるが、おおよそ2～8割	概ね例年並みだが、一部地域で身入りが遅い		

※本資料では 1年貝：令和6年採苗  
2年貝：令和5年採苗  
3年貝：令和4年採苗 とする。

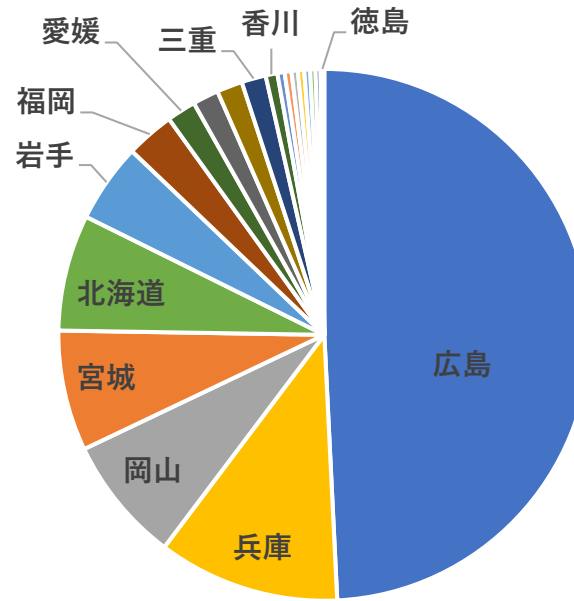
# 【参考】 養殖力キの主な生産地

産地別生産量割合 (2024年)



	生産量 (トン)	生産量割合
広島	94,290	63.6%
宮城	15,190	10.3%
岡山	14,671	9.9%
兵庫	7,348	5.0%
岩手	5,058	3.4%
北海道	3,682	2.5%
三重	1,716	1.2%
福岡	1,464	1.0%
長崎	891	0.6%
香川	763	0.5%
石川	729	0.5%
愛媛	573	0.4%
新潟	491	0.3%
京都	249	0.2%
静岡	237	0.2%
佐賀	198	0.1%
島根	186	0.1%
大分	105	0.1%
熊本	98	0.1%
徳島	91	0.1%
その他	119	0.1%

産地別生産額割合 (2024年)



	生産額 (百万円)	生産額割合
広島	20,364	49.1%
兵庫	4,572	11.0%
岡山	3,168	7.6%
宮城	3,030	7.3%
北海道	2,924	7.0%
岩手	1,992	4.8%
福岡	1,212	2.9%
愛媛	732	1.8%
静岡	652	1.6%
長崎	648	1.6%
三重	609	1.5%
香川	296	0.7%
島根	181	0.4%
石川	174	0.4%
京都	160	0.4%
新潟	156	0.4%
佐賀	147	0.4%
大分	137	0.3%
熊本	123	0.3%
徳島	93	0.2%
その他	98	0.2%